



TITLE:

特集「第2回大学教育改革フォーラム:これからの大学はどのような人間の育成を目指すか」の記録 挨拶

AUTHOR(S):

佐藤, 幸治

CITATION:

佐藤, 幸治. 特集「第2回大学教育改革フォーラム:これからの大学はどのような人間の育成を目指すか」の記録 挨拶. 京都大学高等教育研究 1996, 2: 2-3

ISSUE DATE:

1996-06-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/53500>

RIGHT:

記 録

第 2 回大学教育改革フォーラム

挨拶

佐藤 幸治（総長特別補佐）

佐藤でございます。あいにく井村総長が外国に出張しておりますので、代わりましてご挨拶申し上げます。高等教育教授システム開発センターは昨年発足し、3月に第一回目のフォーラムが開かれました。本日は、第二回目のフォーラムということになります。本当にできたばかりで、施設や事務的支援の面で不十分にもかかわらず、京都大学の大学教育改革に真剣にかかわってこられたセンターのご努力に対して、敬意を表したいと思います。

本日はセンター長の岡田教授の基調講演について、麻生先生、寺崎先生から問題提起のご講演をいただき、さらに栗本先生、中村先生、松井先生からコメントをちょうだいすることになっているとかっております。ご協力、まことに有り難うございます。また、文部省からは吉田高等教育局長にご参加いただきました。お忙しいにもかかわらずご出席下さいましてご厚情に深く感謝申し上げますとともに、この問題に関する文部省の熱意を感じる次第であります。

私事にわたって恐縮ですが、私ももうそこそこの歳になりましたが、人に教えるということの難しさを痛感しております。私は26、7年前にアメリカに留学し、帰ってきてからしばらくして講義をもたされたわけですが、その際にケース・メソッドという方法を用いました。これはソクラティック・メソッドともいいますが、判例などの教材を学生に与えて予め読んでくることを要求し、先生と学生とのダイアログの中で、法的問題の処理の仕方を解明する、そういう方法でございます。私が用いましたら、最初は学生の人数が多いんですけども段々に減っていき、しかも学生が教室の後ろに座るようになり、質問に答えてくれる学生も段々少なくなってきました、結局数年にして諦めてしまいました。

その主な原因は私自身の力量不足にあるということは間違いありませんけれども、法学部は自由選択制を採っておりまして、そういう制度の下でケース・メソッドを用いることは、もともとかなり無理があったんじゃないかと今にしています。あるいは、ケース・メソッドはアメリカのロー・スクール－大学院－では有効適切な教育方法であっても、学部段階ではいささか適切さを欠いていたかもしれない、と思ったりしています。とにかくケース・メソッドは数年でやめてしまい、その後は、私が一方的にしゃべるだけという講義形式でやってきました。それでも自分自身でも面白いと思ってしゃべりますと、学生はよく食いついてきてくれました。それは、学生の眼の色や講義後の質問等でわかりました。しかし、この5、6年どうも様子が少し変わってきたという思いをしております。最初は何だかというように思いましたけれども、考えてみますと、それは教師の思い上がりというものであって、現状を正確に把握して、そしてそれを踏まえたうえで、学生の学問的な関心を引き出すような工夫・努力をまずは教師の方でしなければならぬんじゃないかと反省するようになりました。そしてまさにその時に、このセンターが発足するということになりまして、大変意を強くした次第であります。

それから最近教養教育の意義が幸いにも力説されるようになってまいりました。本日その教養教育の意義について、いろいろな角度からお話していただけることを非常に楽しみにしているわけですが、この教養教育の問題を考えます時私いつも、小林秀雄が「常識について」と題するエッセーの中でいっている言葉を思い出します。「厳正な定義を目指して、いよいよ専門化し、複雑化して、互の協力も大変困難になっている今日の学問を、定義し難い柔軟な生活の知恵が、もし見張っていなければ、どうなるでしょう」、と。小林は、学問上の発見や発明にも、こうした定義し難い柔軟な生活の知恵が働かねばならないと示唆しているわけですが、私は、こうした柔軟な生活の知恵というものを refine し豊かにするということに、教養教育の意義があるのではないかと密かに思っていました。

これも私事にわたって恐縮ですが、過日さる席でたまたま隣り合わせになった方－この方は京大工学部出身で、私より数年後のご卒業で、会社でご活躍なさっておられるのですが－から、教養部の学生時代に上野先生の芸術学の講義が大変面白く、卒業後同好の士とカタラって上野先生を囲む会を作った、上野先生が亡くなられた後もその会を続けてきている、というようなお話を伺いました。私自身は教養部時代は誠に怠惰な学生で、どうみても立

派な学生とは申せなかったんですけれども、実はこの上野先生の芸術学の講義は1回も欠かさずに出席いたしました。私は卒業後憲法学を職業とするようになりましたけれども、人権とか個人の尊厳といった問題を考える時、なぜなのか私自身よくわからないのですが、上野先生の荘厳についてのお話、とりわけ「ススキの原はなぜ荘厳か」といったことを熱っぽくお話になった教室の場面とどこかで実際にみたススキの原を、欠くことのできない背景としていつも思い出すのです。

つい余計なおしゃべりをしてしまいました。京都大学がその使命を果たしていくためには、様々な課題がございます。その中で一番大事なひとつは、いかにして良き教育をなしうるかということであり、この課題は充実した教養教育をいかにして実現できるかに大きくかかっているように思います。11月19日に井村総長が再選され、就任受諾のスピーチをなさいましたけれども、そのスピーチにおいてまずこのセンターの存在に触れ、センターの協力を得ながら京都大学における教養教育の充実を図ることが、これからの2年間の自分の使命のひとつだ、とおっしゃったことを大変印象深く聞きました。本日のフォーラムが、本センターの今後の活動のうえで、大きな示唆を与え、励ましとなりますことを期待いたしまして、簡単ではございますけれどもご挨拶とさせていただきます。どうも有り難うございました。